

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：21402

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370610

研究課題名(和文) コーパスを利用した日本語述語形式の発達に関する学習者言語研究と日本語教育への応用

研究課題名(英文) A corpus-based study of learner languages on the L2 development of predicate forms in Japanese and its application to Japanese language teaching

研究代表者

堀内 仁 (Horiuchi, Hitoshi)

国際教養大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：40566634

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、既存の学習者コーパス及び日本語コーパスを用いて、日本語学習者の産出する述語形式のうち丁寧体動詞の発達に関する実態調査を行うと同時に、母語の異なる学習者グループ間、あるいは習熟度の高いレベルの学習者と日本語母語話者との比較を含む対照中間言語分析を行った。その結果、一般に日本語学習者の習熟度が上がると助動詞マスを含む標準的丁寧体動詞のパラダイムの使用が減少するのに対して、助動詞ノダや「普通体動詞+です」といった非標準的丁寧体動詞のパラダイムの使用が増加すること、日本語母語話者と比べて、韓国語母語話者は丁寧体動詞をより少なく使い、中国語・英語母語話者はより多く使うことが分かった。

研究成果の概要(英文)：In this study, I investigated the actual usage of polite forms of verbs among predicate forms produced by L2 learners of Japanese, and made a Contrastive Interlanguage Analysis that involves comparisons of the use of polite forms of verbs among L2 learners who have different L1 backgrounds and between native speakers of Japanese and L2 learners, using existing learner corpora and corpora of native speakers of Japanese. As a result, I found out the fact that the paradigmatic use of standard polite verbs with the auxiliary verb 'masu' decreases, while the paradigmatic use of nonstandard polite verbs with the auxiliary verb 'noda' or the form of 'plain forms of verbs + desu' increases, as learners' proficiency levels become higher, and the fact that the standard polite verbs are used less frequently by Korean-speaking learners but more frequently by Chinese- and English-speaking learners than native speakers of Japanese.

研究分野：言語学、日本語教育

キーワード：コーパス 日本語丁寧体動詞 第二言語発達 対照中間言語分析

1. 研究開始当初の背景

本研究以前に筆者は一方で、比較的プロフィシエンシーレベルの高い学習者が時折用いる非標準的な丁寧体動詞(「～ませんです、～たです(けど)」など)の使用に、もう一方でコーパスを用いた学習者言語の研究(特に形態素習得順序・第二言語発達段階研究)に関心を抱いていた。本研究の開始当初は、こうした形式も含めて第二言語学習者の産出する日本語述語形式一般に関して、学習者コーパスに基づく包括的な実態調査を行う予定であった。

2. 研究の目的

しかし、時間的な制約もあり、本研究では、コーパスデータの分析に基づき、日本語丁寧体動詞の第二言語習得・発達過程を明らかにすることを目的とした。具体的には、学習者コーパス(及び母語話者コーパス)を使って、以下の点を解明することを目的とした。

- (1) 上述した非標準的な丁寧体動詞の使用実態
- (2) 丁寧の助動詞マスを含む標準的な丁寧体動詞の使用実態
- (3) 学習者言語における丁寧体動詞体系の習得・発達
- (4) 日本語母語話者や母語の異なる学習者間の丁寧体動詞使用の相違
- (5) 第二言語習得研究で提案されてきた形態素習得順序・第二言語発達段階仮説の予測との異同

3. 研究の方法

本研究は学習者コーパスのデータを用いて行われたが、通常区別されるコーパス駆動型(corpus-driven)研究とコーパス検証型(corpus-based)研究(石川 2012: 26-32)の折衷的アプローチを採用した。つまり、本研究は、従来その実態が解明されていない日本語学習者の丁寧体動詞の使用に関する事実を明らかにするためのコーパス駆動型研究であると同時に、先述の第二言語習得研究の成果(仮説)を検証するためのコーパス検証型研究でもある。

学習者コーパスとして本研究では KY コーパスを用いた。KY コーパスは 90 人分(中国語、英語、韓国語を母語とする学習者がそれぞれ 30 人ずつ)の ACTFL-OPI のインタビューを文字化したもので、プロフィシエンシーレベルは、母語別学習者グループ毎に、初級(N)5人、中級(I)10人、上級(A)10人、超級(S)5人ずつである。

本研究では、対照中間言語分析(Contrastive Interlanguage Analysis: Granger 1998)の方法に倣い、日本語母語話者や他言語を母語とする学習者との比較のために、KY コーパスと似た状況のインタビューや対話を含む日本語母語話者コーパスのデータも分析した。本研究では、日本語話し言葉コーパス(CSJ)の「対話(学会、模擬、

課題、自由)」、多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)の母語話者を被験者とする「対話」「ロールプレイ1、2」、首都大学東京の大学生インタビューデータ(MIC-J コーパス)を用いた。

また、KY コーパスは日本語学習者横断コーパスであるが、それを疑似横断的効果(pseudo-longitudinal effect)を狙った準横断的データ(quasi-longitudinal data)と見做して、第二言語発達の観点から考察を試みた(Meunier 2015)。

データの検索には、主としてオンライン検索ツール(KY コーパスには「タグ付き KY コーパス」、CSJ と I-JAS には「中納言」)を用いた。また、オンライン検索ツールを持たないコーパスデータは、テキストエディタや形態素解析ツールを用いてデータを処理し、Excel 上で検索を行った。

4. 研究成果

(1) 非標準的な丁寧体動詞の使用実態

「普通体動詞+です」: KY コーパス全学習者では中級(I)と上級(A)でパラダイムを形成した。

表1 KY コーパス全学習者「普通体動詞+です」

	スルデ ス	シタ デス	シナイ デス	シナカッタ デス
I	6	3	26	3
A	9	6	24	4

「普通体動詞+んです」: KY コーパス全学習者では上級(A)と超級(S)でパラダイムを形成した。

表2 KY コーパス「普通体動詞+んです」

	スルン デス	シタン デス	シナイ ンデス	シナカッ タンデス
A	364	142	129	19
S	389	100	78	7

「マス形+です」「マス形+んです」の出現は散見するものの、パラダイムを形成するに至るレベルは現れなかった。但し、「マス形+です」は初級・中級では比較的多く出現するが、上級以降での出現は少ない。一方、「マス形+んです」は上級までの出現は少ないが、超級で比較的多く出現する。

(2) 丁寧の助動詞マスを含む標準的な丁寧体動詞(マス活用形式)の使用実態

マス活用形式のパラダイム: KY コーパス全学習者の動詞丁寧化率(=マス活用形式数/動詞数×100)を見ると、レベルが高くなるにつれ、マス活用形式のパラダイム全体の使用頻度が低くなること、パラダイム内では「マス>マシタ>マセン」の頻度順で、これら3活用形が90%以上を占める。

表3 KY コーパス全学習者の「Vマス」

	N	I	A	S	total
ます	30.9%	21.4%	13.3%	10.3%	15.2%
ました	12.7%	10.3%	4.0%	2.4%	5.5%
ません	5.7%	3.9%	1.6%	1.2%	2.2%
まして	0.0%	0.1%	0.3%	1.1%	0.5%
ましょう	1.0%	0.3%	0.2%	0.2%	0.3%
ませんでした	0.0%	0.3%	0.1%	0.1%	0.2%
全マス形	50.3%	36.3%	19.7%	15.4%	23.8%

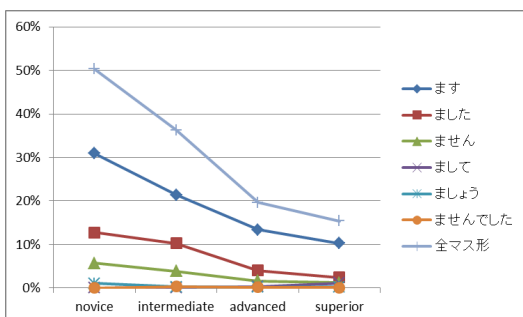


図1 KY コーパス全学習者の「Vマス」推移

マス活用形式の後接語: KY コーパス全学習者の使用したマス活用形式のうち、特にそのほぼ100%を占める「マス、マシタ、マセン」の3活用形それぞれの後接語率(各後接要素数/各マス活用形式数×100)で上位10位までの結果を表4~表6に示す。

表4 KY コーパス マス後接語率

マス+	N	I	A	S	all
か	6.6%	11.6%	4.1%	6.6%	7.4%
ね	0.8%	2.3%	8.9%	7.4%	5.7%
けど	0.0%	3.6%	8.4%	5.1%	5.4%
から	4.5%	4.6%	6.3%	3.5%	5.0%
が	1.2%	0.7%	5.0%	3.5%	2.9%
よ	0.4%	1.2%	4.1%	2.1%	2.4%
ので	0.0%	0.6%	1.6%	6.4%	2.0%
し	0.0%	0.3%	2.6%	4.0%	1.8%
よね	0.0%	0.0%	2.4%	2.1%	1.3%
と(条件)	0.0%	0.1%	0.5%	4.6%	1.1%
total	15.2%	25.8%	49.6%	52.6%	39.1%

表5 KY コーパス マシタ後接語率

マシタ+	N	I	A	S	all
けど	0.0%	2.4%	10.2%	8.3%	5.4%
か	0.0%	4.4%	0.8%	0.7%	2.4%
ね	0.0%	0.4%	5.6%	2.1%	2.2%
から	2.0%	1.1%	2.1%	2.1%	1.6%
ので	0.0%	0.2%	0.5%	10.4%	1.5%
し	0.0%	0.4%	2.9%	2.1%	1.4%
が	1.0%	0.9%	1.9%	1.4%	1.3%
ら	0.0%	0.0%	2.7%	2.8%	1.2%
よ	0.0%	0.0%	1.6%	2.8%	0.9%
んで	0.0%	0.0%	1.9%	1.4%	0.8%
total	4.0%	12.2%	42.8%	92.4%	22.7%

表6 KY コーパス マセン後接語率

マセン+	N	I	A	S	all
ね	0.0%	1.0%	16.0%	5.6%	6.3%
が	2.2%	2.4%	4.7%	23.6%	6.3%
けど	0.0%	3.4%	10.7%	8.3%	6.1%
か	4.4%	5.8%	5.3%	6.9%	5.7%
から	4.4%	3.4%	4.0%	0.0%	3.2%
です	8.9%	4.8%	0.0%	0.0%	3.0%
ので	0.0%	1.0%	2.7%	8.3%	2.5%
けれども	0.0%	0.0%	6.0%	1.4%	2.1%
よ	0.0%	1.0%	1.3%	2.8%	1.3%
し	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	1.1%
total	22.2%	31.9%	68.7%	73.6%	40.9%

まず、マス3活用形式に共通に用いられる後接語は、「カ、ネ、ケド、カラ、ガ、ヨ、ノデ、シ」であった。特に「カ、ネ、ケド、カラ」は常に上位5位以内に見られる。

上位10語のうち、各活用形式に特有の後接語としては、マス+「ヨネ、ト(条件)」、マシタ+「(タ)ラ、ンデ」、マセン+「デス、ケレドモ」が見られた。

プロフィシエンシーレベル順に後接語を見ると、どの活用形式においても一般にレベルが高くなるにつれ後接語率も上昇することが分かった。特に、上級以降の後接語率は高く、超級におけるマシタの後接語率は90%を超える。

後接語の初出レベルについては、全マス活用形式において「ガ、カラ」が初級、「ケド、ノデ」が中級に見られた。また、全てのマス形式にはないが、「カ、ネ、デス、ヨ、カ」は初級から、「シ、ト」は中級から、「ヨネ、ケレドモ、タラ、ンデ」は上級から現れた。

更に、後接語率の最高レベルとしては、「(マセン+)デス」が初級、「ネ、ケド、ヨネ、ンデ、ケレドモ」が上級、「ノデ、ト、タラ」が超級であった。「カラ、カ、ガ、シ」は二つ以上のレベルで後接語率が最高となり、後接するマス形式が否定か肯定かで違いが見られた(「否定+カラ」は初級、「肯定+カラ」は上級で、「肯定+ガ/シ」は上級、「否定+ガ/シ」は超級で、「肯定+カ」は中級、「否定+カ」は超級で最高となった)。

(3) 学習者言語における丁寧体動詞体系の習得・発達

以上の(1)(2)の結果から、プロフィシエンシーレベルが高くなるにつれ、標準的な丁寧体動詞の体系的使用が減少する一方で非標準的な丁寧体動詞の体系的な使用が増えるという傾向が観察された。但し、前者の傾向と後者の傾向との間に相関関係・相補関係があるかどうかについての本格的な検討は今後の課題とする。

また、非標準的な丁寧体動詞のバリエーションも含めた各丁寧体動詞形式の頻出時期・パラダイム構成時期を考慮に入れると、<標準的な丁寧体動詞(マス形)「マス+デス」形

「普通体動詞+デス」形 「普通体動詞+
ンデス」形 「マス+ンデス」形>という学
習者言語の発達過程が考えられるが、これに
ついては本格的な検討は今後の課題とする
(Horiuchi 2014a, b)

(4) 日本語母語話者や母語の異なる学習者
間の丁寧体動詞使用の相違

日本語母語話者との相違

丁寧体動詞パラダイム: 3つの母語話者コ
ーパス (CSJ、I-JAS、MIC-J) のマス活用形
式の動詞丁寧化率 (= マス活用形式数 / 動詞
数 × 100) を見ると、「マス>マシタ>マセン」
の頻度順は KY コーパスの場合と同様である
が、その頻度が全体的に低いことが分かる、

表7 日本語母語話者の「Vマス」

	CSJ	I-JAS	MIC-J	all-NS
ます	6.3%	7.6%	9.9%	7.4%
ました	2.3%	2.8%	4.0%	2.8%
ません	0.4%	0.8%	0.8%	0.6%
ましょう	1.0%	0.1%	0.1%	0.6%
まして	0.2%	0.7%	0.3%	0.3%
ませんでした	0.1%	0.1%	0.0%	0.1%
total	10.3%	12.0%	15.1%	11.8%

丁寧体動詞の後接語: 3つの母語話者コ
ーパスに現れるマス活用形式のうち、「マス、
マシタ、マセン」の3活用形それぞれの後接
語率 (各後接要素数 / 各マス活用形式数 ×
100) で上位10位までの結果を表8~表10に
示す。

表8 日本語母語話者のマス後接語

マス+	CSJ	I-JAS	MIC-J	All NS
ね	17.2%	19.8%	16.0%	17.3%
か	15.2%	1.0%	34.0%	17.1%
よ	14.5%	5.3%	0.0%	8.4%
けど	6.3%	7.0%	4.0%	5.8%
し	2.3%	2.8%	3.0%	2.7%
ので	0.0%	3.0%	1.0%	1.0%
から	2.0%	2.0%	0.0%	1.2%
よね	0.0%	0.0%	2.0%	0.7%
けれど	0.7%	1.1%	0.0%	0.6%
が	0.0%	0.9%	1.0%	0.5%
total	62.6%	46.5%	64.3%	59.3%

表9 日本語母語話者のマシタ後接語

マシタ+	CSJ	I-JAS	MIC-J	All NS
ね	14.2%	21.7%	13.1%	15.6%
けど	8.0%	8.1%	3.0%	6.3%
か	3.0%	1.0%	5.0%	3.1%
よ	6.0%	0.0%	0.0%	2.7%
から	2.1%	1.0%	0.0%	1.2%
が	1.3%	1.0%	0.7%	1.2%
し	0.0%	4.0%	0.0%	0.9%
けれど	1.1%	1.0%	0.0%	0.7%
っけ	0.5%	0.0%	0.0%	0.6%
んで	0.5%	0.0%	0.0%	0.2%

ので	1.0%	0.0%	0.0%	0.2%
total	39.8%	41.9%	28.1%	36.5%

表10 日本語母語話者のマセン後接語

マセン+	CSJ	I-JAS	MIC-J	All NS
か	13.7%	2.0%	11.3%	9.3%
ね	9.6%	7.0%	2.0%	6.6%
けど	6.8%	5.0%	6.0%	6.0%
が	2.7%	12.0%	1.9%	5.5%
から	2.7%	5.0%	1.9%	3.3%
ので	1.0%	4.0%	0.0%	1.6%
と	2.7%	0.0%	0.0%	1.1%
よ	3.0%	0.0%	0.0%	1.1%
けれど	1.4%	2.0%	0.0%	1.1%
総計	61.6%	40.4%	30.2%	45.9%

まず、3活用形式に共通に用いられる後接
語は、「カ、ネ、ケド、カラ、ガ、ヨ、ノデ、
ケレド」で、「ケレド」を除き、KY コーパス
の場合と同じであった。特に「カ、ネ、ケド」
は常に上位5位以内に見られ、KY コーパスに
見られる「カラ」を除き、同様の結果であ
った。

上位10語のうち、各活用形式に特有の後
接語としては、マス+「ヨネ、シ、マシタ
+「ツケ、シ、マセン+「ト」が見られた。

母語の異なる学習者間の相違

以上のような、学習者言語全体、及び、日
本語母語話者言語の丁寧体動詞使用実態調
査を同じ要領で、KY コーパスの英語母語話者
(ENG)・中国語母語話者(CHN)・韓国語母語
話者(KOR)にそれぞれ行った。紙幅の都合
上、図表は掲載せず、主な結果のみを記述す
る。

丁寧体動詞のパラダイム: KOR は、学習者
言語全体と同様に、プロフィシエンシーレ
ベルが上がるにつれて、丁寧体動詞のパラ
ダイム全体の使用頻度が減少する傾向を示
した。ENG も基本的にはそうした使用頻度
の減少傾向を示したが、上級から超級にか
けての減少が緩やかだった。CHN は、上
級から超級にかけて増加傾向を示し、右
肩下がりの減少傾向は得られなかった。

丁寧体動詞のパラダイムについてもう
一つ特筆すべきことは、日本語母語話者
と母語の異なる超級学習者との間に見ら
れる丁寧化率の違いである。日本語母語
話者(CSJ10%、I-JAS12%、MIC-J15%)
に比べて、CHN(29%)とENG(20%)は
丁寧化率が高いのに対し、KOR(9%)
は丁寧化率が低い。

この見かけ上の違いが意味のある差かど
うか確かめるため、カイ2乗検定によって
統計検定を行った結果、CHNとENGに
関しては全ての母語話者コーパスと比
べて有意水準1%で有意に多く丁寧体
動詞を使用していることが分かった。一
方、KORはCSJとI-JASとの比較では
有意差がなく、MIC-Jとの比較では
有意水準1%で有意に少なく丁寧体動
詞

を使用していることが分かった (CHN と各母語話者コーパス間では、MIC-J: $\chi^2=251.4$, $df=1$, $p<.01$; CSJ: $\chi^2=573.7$, $df=1$, $p<.01$; I-JAS: $\chi^2=395.4$, $df=1$, $p<.01$ 、ENG と各母語話者コーパス間では、MIC-J: $\chi^2=36.465$, $df=1$, $p<.01$; CSJ: $\chi^2=140.088$, $df=1$, $p<.01$; I-JAS: $\chi^2=91.232$, $df=1$, $p<.01$ 、KOR と MIC-J 間では、 $\chi^2=9.62$, $df=1$, $p<.01$ であった)。

動詞丁寧化率における上記の学習者間の違いが母語に起因するかどうかは今後さらなる精査が必要であるが、学習する文法項目・文法体系と類似のシステムが学習者の母語にある場合、学習者はその使用を控え、逆に学習する文法項目・文法体系と類似のシステムを母語に持たない学習者はそれを過剰に使用するという傾向がある、といった仮説を提案しておきたい。

丁寧体動詞の後接語: まず、マス3活用形式に共通に用いられる後接語は、ENG は「カ、ネ、ケド、カラ」、CHN は「カ、ネ、ケド、ガ、ノデ、シ」、KOR は「カ、ネ、ケド、カラ、ガ」であった。これらの後接語のうち、ENG と KOR ではそれぞれ全て上位5位以内に入るが、CHN では「カ、ネ」のみが上位5位以内に入った。

各活用形式に特有の後接語としては、ENG では、マス+「シ、ト(条件)、ヨネ、カネ、ヨ」、マシタ+「ンデス、デスカ、ケドネ、ノハ」、マセン+「ケレドモ」が、CHN では、マス+「カラ、ケレドモ、ト(条件)」、マシタ+「(タ)ラ、ンデ」、マセン+「デス、ケレドモ、カラ」が、KOR では、マス+「シ、ケレドモ」、マセン+「デスケド、ケレド」が見られた。

プロフィシエンシーレベル順に見た後接語は学習者全体では、レベルが上がるにつれて後接語率も上がったが、母語別にみると、CHN では、マス活用形のうち、マセンへの後接率は上級から超級にかけて減少する。

後接語の初出レベルについては、ENG では、初級「カ、ネ」、中級「カラ、ケド、ノデ、シ、ヨ」、上級「ガ、ト、ヨネ、カネ、ケドネ、ガ、ケレドモ」、超級「ンデス、ノハ」が、CHN では、初級「カ、ネ、ヨ、デス」、中級「カラ、ケド、ガ、ノデ、ト、ケレドモ、シ」、上級「タラ、ンデ」が、KOR では、初級「ガ、カラ、ケレド」、中級「ケド、カ、ネ、ヨ、ノデ、シ」、上級「ヨネ、ケレドモ」が現れた。

(5) 第二言語習得研究で提案されてきた形態素習得順序・第二言語発達段階仮説の予測との異同

日本語丁寧体動詞の第二言語習得・発達に関する言及は、以下の研究に見られる。Banno & Komori (1989)の第二言語形態素習得研究では、「マス マセン マシタ」の順で習得される(「マス・マセン」が最も早く習得される)という結果が、Kawaguchi(2000)の処理可能性理論研究では、マスが第1段階

(Invariant formsの処理可)、マスカ、マセン、マシタが第2段階(lexicalな処理可)の順に発達するという結果が得られた。また、後述するように、本研究では、丁寧体動詞の後接要素の習得も考察要素に含めるが、峰(2015)による処理可能性理論研究では、接続辞は「テ カラ ケド タラ シ ノデ・ト テモ」、文末表現は「カ・ネ・ヨ・ナ」「デシヨ(ウ)・ジャナイ・ナァ・カナ・ヨネ」「ノ・ワケ・モノ」の順で発達するという結果が得られた。更に、迫田(2013)の学習者コーパス研究では、学習者の動詞「思う」の発達過程を取り上げ、「思います 思いますよ 思いますよね」のように新しい形態素がもとの形態素に付加されて発達する母語話者の第一言語発達過程(cf.くつつき仮説:岩立1981)との共通性を指摘した。

本研究の結果と第二言語形態素習得順序に関する先行研究との違いは以下の通りである。まず、Banno & Komori(1989)の習得順序「マセン マシタ」は確認できず、「マシタ>マセン」の順に多用される事実を見た。また、Kawaguchi(2000)の「マス マスカ/マセン/マシタ」の順序差も確認できなかった。峰(2015)の接続助詞の発達段階に関しても、異なる母語を持つ学習者グループによって、あるいは、前接する異なるマス活用形式によって、後接語は様々であり、学習者一般に共通する発達段階を特定するのは困難であった。また、迫田(2013)のくつつき仮説を支持するケースは多少見られた(「ヨヨネ」「ケレド ケレドモ」)。

<引用文献>

- Banno, Eri, and Saeko Komori. 1989. A study of Japanese acquisition order. 『白馬夏季言語学会論文集』, 60-73.
- Granger, Sylviane. 1998. Learner English on Computer. Addison Wesley Longman Limited.
- Horiuchi, Hitoshi. 2014. A corpus-based analysis of the paradigmatic development of semi-polite verbs in Chinese and Korean learners of Japanese. *Journal of Japanese Linguistics*, vol.30, 55 - 76.
- Horiuchi, Hitoshi. 2014. A corpus-based analysis of non-standard polite forms of verbs in English, Chinese, and Korean learners of Japanese. *Akita International University Global Review*, vol.6., 78 - 107.
- Kawaguchi, Satomi. 2000. Acquisition of Japanese Verbal Morphology: Applying Processability Theory to Japanese. *Studia Linguistica* 54(2), 238-248.
- Meunier, Fanny. 2015. Developmental Patterns in Learner Corpora. In Granger Sylviane, Gaetanelle Gilquin,

and Fanny Meunier (eds.), The Cambridge Handbook of Learner Corpus Research, 379-400. Cambridge University Press.

石川慎一郎. 2012. 『ベーシックコーパス言語学』ひつじ書房.

岩立志津夫. 1981. 「一日本語児の動詞形の発達について」『学習院大学文学部研究年報』27、191-205.

窪田富男. 1982. 「学習者の見た動詞の活用とまどいの過程」『日本語教育』47号、33-46.

峰布由紀. 2015. 『第二言語としての日本語の発達過程 言語と思考の Processability』ココ出版.

野田尚史. 2009. 「日本語非母語話者の待遇コミュニケーション デスマス形と非デスマス形の運用を中心に」『待遇コミュニケーション研究』6、113-126、待遇コミュニケーション学会.

迫田久美子. 2013. 「日本語学習者の発話コーパスと動詞の発達」『国語研プロジェクトレビュー』Vol.3 No.3、107-116. 国立国語研究所.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

Horiuchi, Hitoshi. 2014. A corpus-based analysis of the paradigmatic development of semi-polite verbs in Chinese and Korean learners of Japanese. Journal of Japanese Linguistics Vol. 30, pp. 55-76. The Dilena Takeyama Center for the Study of Japan and Japanese Culture, San Francisco University. 査読有.

Horiuchi, Hitoshi. 2014. A corpus-based analysis of non-standard polite forms of verbs in English, Chinese, and Korean learners of Japanese. Akita International University Global Review Vol. VI, pp. 78-107. Akita International University Press. 査読有.

〔学会発表〕(計 4 件)

堀内 仁、中国語母語話者の日本語丁寧体動詞の発達：コーパスに基づく分析、第11回 OPI 国際シンポジウム、2017.8.5、淡江大学(台湾)

堀内 仁、韓国語を母語とする日本語学習者の丁寧体動詞の習得と発達：や衣装中間言語分析の観点から、2017年度日本語教育学会春季大会、2017.5.27、早稲田大学(東京)

堀内 仁、英語母語話者の日本語丁寧体動詞の使用実態：コーパスに基づく分析、2017 AATJ Annual Spring Conference、

2017.3.16、Sheraton Centre Hotel、Toronto (カナダ)

堀内 仁、コーパスに基づく日本語学習者の丁寧体動詞の使用実態の分析、2016年待遇コミュニケーション学会秋季大会、2016.10.29、早稲田大学(東京)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内 仁 (HORIUCHI, Hitoshi)

国際教養大学、専門職大学院 グローバル・コミュニケーション実践研究科 日本語教育実践領域、准教授

研究者番号：40566634